

イギリスの国語教育における詩創作指導論の展開

— 国語教育雑誌 *English in Education* の調査を中心に —

中井悠加

(2012年10月2日受理)

The Transition of Teaching Writing Poetry in the UK
— Examination of the *English in Education* —

Yuka Nakai

Abstract: The purpose of this article is clarifying what do the researchers think about the teaching writing poetry and how do they establish it in the English Education in the UK by examining the articles in the *English in Education* that is the all-round English Education Journal in the UK.

I considered 55 articles in that journal that I could collect and reached a conclusion: the period from 1960s to 1980s is the flourishing stage of teaching writing poetry; the period of 1990s is the slumping stage of it; the period after 2000s is the renaissance of it. Such transition of teaching writing poetry in the UK is profoundly affected by the Education Reform promoted in the late 1980s, diversification of social and language environment, and the reader response theories spreading in the literature education. In these historical shifts, I clarified that we can capture the figure of teaching writing poetry in the UK reflected in the traditional experientialism and language functionalism of the UK.

Key words: transition of teaching writing poetry, UK, *English in Education*

キーワード：詩創作指導の変遷、イギリス、*English in Education* 誌

1 研究の目的

本稿は、現代イギリスの詩創作指導に関する理論と方法に学ぶことで、表現者として子どもたちの育ちに寄与するものとしての詩創作の意義と役割をふまえた詩創作指導論の構築を目的とした研究の一環である。

安(2005)は、イギリスの音声国語教育史を整理する中で、そこに「イギリス独特の機能主義言語論」が色濃く反映されている側面を多く見いだしている。「現実の場面のなかで自然に習得させること」「言語が実際に機能している状態での教育」¹⁾をめざすこうしたイギリスの音声国語教育の背景には、湊(1975)が指摘するイギリスの国語教育に関する3つの特徴と結び

ついている²⁾。

- ・場面・文脈の重視
- ・子どもの人間的成長への関心
- ・経験主義に立つ言語観

湊は「イギリスには経験を重視する思想が顕著である」³⁾と指摘し、また「学校や教室を一種の人間の生活共同体とみなす発想」⁴⁾の色濃さを見いだしている。そしてイギリスでは、「個人が国語の授業で行っていることの個人にとっての意味」⁵⁾に焦点を合わせた国語教育がめざされることが大きな柱とされており、それはこのようなイギリスの伝統的な経験主義と結びつく。現実の場面、つまり共同体として営まれる社会生活の中で不可欠な要素は、あらゆる形での人とのかかわり合いである。人は一人で生きるのではなく、

人とのコミュニケーションの中で生き、ことばを用い、一人のひととして成長していく。イギリスの経験主義的国語教育観は、こうした「生活共同体」としての教室という、人とのかかわり合いが重視された教室づくりを導いているといえる。そして、どのような場面・文脈で、ことばがどのように用いられて機能するのか、ということ強く意識するために、安が指摘するような「機能主義的言語論」を強く反映するような国語教育論が構築されてきているのである。

つまり、イギリスの国語教育論では、人とのかかわり合いの中での個の成長と、言語の機能を無視することのない営みが続けられてきている。こうした国語教育観を持つイギリスにおいて、詩創作指導はどのように論じられ、それを学校教育の中でどのように実践しているのかということをはっきりとすることは、国語能力の育成に資する詩創作指導の在り方を探究するための一助として重要な示唆を持つと考えられる。しかしイギリスの詩創作指導に関する理論や具体的な実践についてのわが国の先行研究は少なく⁶⁾、また体系的に行われた研究は全くない。そこで本稿では、変動するイギリスの教育状況の中で、詩創作指導はどのように考えられ、イギリスの国語科教育の中でどのように位置づけられて今日に至るのかということを探ることを目的とする。そのことを通して、イギリスの詩創作指導の特徴を浮き彫りにすることができればよいと考えている。

2 本研究の方法

松山(1994)は、イギリスの国語教育界において1960年代は「教育制度の改革案があいつぎ、「教育拡張の時代」と呼ばれた」⁷⁾と述べ、それを大きな転換点のひとつとしてとらえている。さらに、Shayer(1972)は1900年から1970年のイギリスにおける国語教育を概観する中で「1960年から1970年は〈子どもの詩集の10年間〉と呼んでもよいだろう」⁸⁾と述べ、子どもの書く詩に関する価値の見直しにともなった詩創作指導の急速な発展が見られることを指摘している。これらの指摘から、1960年をイギリスの国語教育史において現代に至る一つの境と認め、ここで対象とする考察年代を1960年代以降と定める。そして、イギリスの総合的な国語教育研究雑誌である *English in Education* における創刊の1964年(vol.A1⁹⁾)から2012年(vol.46)までの、詩教育に関する論文全てを拾い上げ、その動向を追う方法を用いる。ただし、1974年以前の論文には題目のみ入手済した状態で本文未入手のものが多く、題目のみから詩に関するものと

判断して拾い上げている。そのため論文内容に関して本稿で主に考察対象とするのは1975年以降の論文とし、それ以前のものに関しては論文題目のみから推察できる考察のみを行う。

国語教育研究雑誌である *English in Education* はイギリスの NATE (National Association for the Teaching English) が発行するイギリス国内の国語教育研究者や学校教員などの国語教育関係者に広く読まれている学術誌である。イギリスをはじめとして「英語と英文学が学校教育や高等教育のカリキュラムに含まれるその他の国の国語教育全ての局面に関連した研究について報告する論文や記事」¹⁰⁾を取り扱っている。掲載される論文は Academic Review Board (学術審査委員会) によって「無記名の審査を通して全ての投稿に対して公正な検討」¹¹⁾が加えられる。年3回の発行であり、それぞれが Spring (Issue1), Summer (Issue2), Autumn (Issue3)号とされている。このような雑誌の特徴から、本雑誌を考察対象として取り上げる理由を以下の3点に示す。

- ①イギリスにおける国語教育を推進する全国的な組織である NATE が編集していること
- ②イギリスにおける国語教育の全体的な側面を網羅する雑誌であること
- ③多くの国語教育関係者に関心が持たれていること

なお以下の考察においては、*English in Education* 誌所収の論文を指す場合著者名の前に「*」を付すことでその他の著作・論文との差異化をはかることとする。

3 *English in Education* に見る詩教育の動向

3-1 詩教育に関する論文の収録状況

考察対象とした *English in Education* 全150巻のうち48巻に詩教育に関する論文が収録されており、その本数は80本となった。そのうち、1966年の Issue1, 2007年の Issue3の2巻は詩教育に関する特集が組まれており、全編が詩を扱う論文となっている。

これら80本のうち、創刊の1964年から1974年の11年間では、内容について詳しく検討はできないものの詩教育に関する25本の論文が認められる。1975年以降の論文に焦点を絞るとその数は55本である。その論文内容を検討したところ、詩教育の中でも詩創作指導に関する論文が19本と最も多いことが明らかとなった。また、これら詩創作指導に関する論文の数を年代ごとに区切ると次のような結果となった。

1970年代 (1975~1979年) : 3本 / 6本 (50%)

1980年代 (1980～1989年) : 4本 / 13本 (30.7%)

⑨⑩⑪⑫

1990年代 (1990～1999年) : 1本 / 12本 (8.3%)

1990年代 (1990～1999年) : ①②③③⑥⑦⑦⑧⑧⑪

2000年代 (2000～2009年) : 7本 / 17本 (41.1%)

⑬⑭⑭

2010年代 (2010～2012年) : 4本 / 7本 (57.1%)

2000年代 (2000～2009年) : ②③③④④⑧⑧⑨⑩⑫

⑮⑯⑯⑯⑰⑱⑱⑲

これらの数値を見ると、他の年代に比べて1990年代における詩創作指導に関する論文数が極端に少なくなっていることが分かる。イギリスにおける1990年代は、1988年に教育改革が行われ、1989年に初めての国家規模カリキュラムである National Curriculum (以下 NC) が導入されるというように、学校教育に大きな変動がもたらされた直後という時期である。そうした変動が詩教育にも影響を与えていることは明確である。また、2000年代になり時代が下ると、詩創作指導に関する論文の数は再び急増していることが明らかとなった。

上記のように、数だけを見ても、詩創作指導に対する関心は時代ごとに変化を持っていることが分かる。このような変動を起こす要因は一体何か。収録された論文内容をより詳細に検討していくことで、時代背景の中で詩教育がどのように展開し、その中で詩創作指導がどのように位置づけられてきたのかということをも明らかにする。

3-2 詩教育の動向

ここではまず、詩教育全体の動向を捉えることを目的とし、収集した55本の論文の内容についてそれぞれの年代における詩教育の特徴として挙げられることを以下に示し、考察を行う。55本の論文それぞれが詩教育のどのような側面を取り上げて論じているのかということを読み取ると、以下のような21項目を抽出することができた。

①詩創作指導実践 / ②詩の特性 / ③詩を読むためのアイデア / ④詩に対する意識調査 / ⑤詩創作指導アイデア集 / ⑥詩についての評論文 / ⑦詩教材収集の方法 / ⑧詩への反応調査 / ⑨日常語と詩 / ⑩詩創作指導実践批評 / ⑪伝承童謡¹²⁾ と詩 / ⑫ NC の要請と詩 / ⑬教師と子どもが直面している問題 / ⑭黒人文学の読み / ⑮詩創作と評価 / ⑯マルチモダリティと詩 / ⑰詩教育概観 / ⑱二言語使用者と詩創作 / ⑲詩創作と教師の役割

各年代の論文がこれら抽出できた項目のどれを含んだものかということ調査し、年代別に並べると以下のようになる。

1970年代 (1975～1979年) : ①①②③④⑤

1980年代 (1980～1989年) : ③④⑤⑤⑥⑦⑧⑧⑨

2010年代 (2010～2012年) : ①②④⑧⑮⑱⑲

(1) 各時代に共通していること

これらの項目の広がりを見ると、比較的どの年代にも共通しているのが「②詩の特性」「③詩を読むためのアイデア」「④意識調査」であることが分かる。②の項目は、アリストテレスの「詩学」に基づきながら「詩とは何か」という根本的な定義の問題と向き合い、詩を教室に持ち込み子どもたちと出会わせることはどのような意味を持つのかということについて論じられているもの (*Murray (1975), *Stables (2002), *Pike (2011)) や、戯曲や小説との違いについて論じられているもの (*Stibbs (1995)) がある。「詩とは何か」と問い続けることは、*Stibbs (1995) のようにその他のジャンルに比べて詩が持つ「聴覚的 (aural) な面と視覚的で時間的形式のない (visual and time-free) 側面を併せ持つこと」¹³⁾ といったような特徴を明るみに出す試みであることに加え、「詩的経験とは意味生成の方法である」¹⁴⁾ と *Stables が述べるように、ことばを用いた「意味生成」全体に関わる問題をも浮き彫りにする。そのことと関連して、伝書童謡や日常語などのように、子どもたちが身近に感じている音声言語を取り上げながら、子どもたちと詩との関係について論じているものも見られる。

「③詩を読むためのアイデア」は、話し合いを用いて詩を読み深めようとした実践報告 (*Bowkett, Davie, and Parker (1975)) に加え、クローズ法などを用いて読みの導入を工夫した実践を報告したもの (*Boardman (1985)), 絵画を用いて詩と読み比べる実践 (*Hodges (1995)), 詩に含まれる技術を発見することを読みの出発点とするもの (*Stevens (2007)) が挙げられる。特に *Bowkett らを除く3者の論文では、いかに子どもたちを教材である詩に引き込ませるかということに主眼が置かれていることが読み取れる。このように、子どもたちと詩をどのように引き合わせることで効果的な読みの授業ができるのかということが時代を問わず注目される背景には、子どもたちが詩に対して抱く距離感がイギリスの詩教育における大きな課題となっていることが挙げられる。そのことは、Dias & Hayhoe (1988) の「イギリスの中等学校における詩への注目はあまりなされていないのが現状である。国語教師 (English teachers) らは、詩を教えることに対して不快感を示しており、授業の平均5%ほ

どしか詩を取り扱っていないという傾向がある。」¹⁵⁾ という報告からも読み取れることである。そのことと関係するのが、項目④として挙げた「意識調査」もほとんど全ての年代で見受けられるということである。子どもたちはどのような詩を好むのか (*Clifford (1979)), 詩に対して何を思っているのか (*Tarleton (1983)), 家庭で詩はどのように扱われているのか (*Lambirth (2007)), 詩を学ぶことについてどのように思っているのか (*Hennessy (2011)), というように時代を経るとともに調査内容も変化しているが、共通しているのは子どもたちと詩との関係である。またそれは先に述べたように項目②で「詩とは何か」を問う論文と共通する関心であることが分かる。

(2) NC 導入の影響

NC 導入後、1990年代になって詩創作指導に関する論文が減少したことについては前項で述べた通りである。そのことについては後に詳述することとし、ここではその他見受けられる NC 導入の影響について検討を行う。

NC が導入された1989年に、*Garnett(1989)は NC の中での詩教育の位置を確実にするための「正当な教育課程を築き上げていかなければならない」¹⁶⁾と述べ、その構築に向けた方法について模索している。その論文を皮切りに、NC で要請される詩の読みに重点を置く論文が急増する。NC は学力向上のための教育改革のひとつとしてつくられたものであり、子どもたちが受ける教育は GCSE で高い点を取るという成果を残すためのものといっても過言ではなくなった。詩教育においてもそれは例外ではなく、詩の試験において20世紀以前の伝統的な「主要・重要な作家の文学」¹⁷⁾を正確に理解すること、文学に対する評論文を書けるようになることが求められたのである。その要請に応えることができるように、子どもたちは定められた詩をまず読めるようにならなくてはならない。そのため、「③詩を読むためのアイデア」を取り扱う論文が増えたのだと考えられる。時代を問わず子どもたちと詩との関係について論じられ続けていることが示すように、子どもたちだけではなく教師さえも詩を教室で取り扱うことに不安感を抱いている。そのような状況の中で、NC によって読まなければならないものとして定められた詩に対して積極的な姿勢を持つ必要が生じた。その姿勢を形成することができるような刺激的な詩との出会い方が改めて重要視された結果だといえるだろう。

NC という国家のカリキュラムが登場したことは、イギリスというひとつの国が実施する教育、という強い枠組みを、法的拘束力を持って設定したということ

を意味する。つまり、そこに示されないものは教育しないということ为国が表明したと捉える者がいても不思議ではない。実際に、*Bryan(1995)は NC において黒人文学が扱われていないことを「国家的排除」¹⁸⁾であると強く批判しており、国語の授業は「社会における他者の声と自分との関係を考える機会を持つ」¹⁹⁾場であると主張する。NC の登場は、教室で行われる実際の指導を統一させようとしたという意味のみならず、統一化されたものを示すことによって逆に子どもたちが身を置く多文化社会の姿そのものを浮き彫りにし、大きな課題となって言語を取り扱う国語教育関係者たちにつきつけるという意味を持っていたことが読み取れる。1999年に改訂された NC が基本理念として「市民性 (citizenship)」と強く打ち出したこと²⁰⁾も、こうした社会状況を反映していると同時に詩教育においても「二言語」が強く認識されていくことに影響を及ぼしているといえるだろう。

(3) 論文内容の多様化

論文内容の項目を見ると、1970年代時点では実践報告や指導アイデアに焦点が当てられていたものから、徐々に多様化する傾向にあることが分かる。その中でも目をひくのが、上記でも触れた1990年代から見られる「⑭黒人文化」や「⑮二言語使用 (バイリンガル)」などの多文化教育の論文の増大と、⑯として挙げたメディアやマルチモダリティに関する論文の参入、さらに2010年以降は授業における「⑰教師の役割」に着目する論文も増える。子どもたちは詩をどのようなものとして捉えているのか、詩を教室に持ち込むことが何を意味するか、どのように授業を運ぶのか、ということに集中していたこれまでの論文から大きく変化している点として捉えることができる。

松山(1992)は、1990年代のイギリスの教育について以下のように指摘する。

九〇年代のイギリスの文学教育は、資格試験 GCSE とナショナル・カリキュラム、学習者の文化的・社会的背景の急速な多様化と義務教育終了時の進路の多様化という四項目と母語教育という、時代、文化、制度、言語という魅力的で捉えがたい諸コードの交錯の中に位置づけられていくものであろう²¹⁾。

ここで指摘されているような文学教育の様相は、*English in Education* 誌における論文内容の大きな変化と一致していると考えられる。特に、2001年時点で「8人に一人が、少数民族」であり2010年には「その割合は、おおよそ、5人に一人になっていることが指摘されている」²²⁾ようなイギリスにおける多民族化は、詩教育のみならず国語教育全体が抱える大きな課題と

なっていることは容易に推測がつく。

言語の違いのみならず、現代において子どもたちを取り巻く言語形式そのものも情報技術の急速な発達によって変化してきており、その言語環境の変化に対応する形として詩教育も発展してきていることを、「⑬マルチモダリティと詩」の増加から読み取ることができる。特に *Burm(2003)において初めて「マルチモダリティ」という語が登場する。*Burmはこの語を Kress and Leeuwen(2001)および Kress(2003)の議論から用いて考察しており、同様に羽田(2011)は「ナショナル・カリキュラム(2007)における「マルチモーダル・テキスト (multimodal text)」という文言挿入に影響を与えた」²³⁾として Kress らの「マルチモダリティ」という概念について考察し、「例えば、動画は、文字情報、視覚情報、聴覚情報という「モード」を含み込んだ「マルチモーダル・テキスト」だということになる」²⁴⁾と述べる。こうした子どもたちを取り巻く言語環境における「モード」の多様化は、詩教育においては詩が子どもたちの音声言語と結びつけられながら論じられてきたことと重なり合う。詩も同様に「文字情報、視覚情報、聴覚情報」全てを含み込む言語形式であるということが、「マルチモダリティ」という概念の参入によって改めて強調されるようになるのである。そうした傾向は、*Hughes(2008)が「詩を読むこと、書くこと、再現することにニューメディアを用いることでテキスト、イメージ、音の関係について探ることの可能性」²⁵⁾を主張したり、*Schillinger, Meyer, and Ruth(2010)のようにワークショップにおいて読む・書く・演じるという詩の持つ「モード」の多様性に注目するような論文の増加を導いている。

また、詩を読むことについて取り上げている論文も、1980年代後半から「③読むためのアイデア」から「⑧詩への反応調査」が増えていることが読み取れる。それは、子どもたちにどのように詩を読ませるか、ということへの関心から、子どもたちはどのように詩を読むのか、ということへの関心という変化である。その背景には、1970年代後半から読者反応理論が文学教育に大きな影響を及ぼし始めたことを挙げることができる。論文内容が多様化していくことのひとつの要因として、このように詩の読みひとつとっても、その読み方を追求するだけでなく、その詩と対峙する子どもたちという読者の存在を重要視したことが大きく影響していると考えられる。もともと子どもたちの言語文化と詩との関係を強く意識してきたイギリスの詩教育の伝統は、このように読者反応理論と結びついて詩教育の研究手法に拡がりを持たせるのみならず、先に述べたような詩やことばの音声的、視覚的側面という存在

も浮き上がらせることとなった。そのことが論文内容の多様化を導いたのである。

4. 詩創作指導に関する論文内容

以上のように、教育改革や社会状況の変化などの時代の変化にもなった形で詩教育も少しずつ変化を遂げながら発展してきている。そのような揺れ動く詩教育の中で、*English in Education* 誌において詩創作指導はどのように論じられてきているかということを中心に考察し、イギリスにおける詩創作指導の特徴を歴史的な観点から明らかにしていく。

詩創作指導に関連する論文は、論文のうち全19本である。それらについての項目を再度列挙すると、詩創作指導についての論文は以下の6種類に区分される。

- ①詩創作指導実践
- ⑤詩創作指導アイデア
- ⑩詩創作指導実践批評
- ⑮詩創作と評価
- ⑱二言語使用者と詩創作
- ⑲詩創作と教師の役割

これらに加え、1980年代・2000年代に「⑨日常語と詩」を主に取り上げながらそのことを詩創作と結びつける論文が見受けられる(*Andrews(1989), *Wilson(2001))。これら2つの論ではどちらも、子どもたちが有している「声(voice)」と、それとは反対のものとして考えられている「形式(form)」との関係を結び、両者が相互に作用するという子どもたちの詩創作を通して論じようとするものである。先の6種類に、それら2つの「⑨日常語と詩」を加えたものを年代別に区切ると、以下ようになる。

- 1970年代(1975~1979年)：①①⑤
- 1980年代(1980~1989年)：⑤⑤⑨⑩
- 1990年代(1990~1999年)：①
- 2000年代(2000~2009年)：⑨⑩⑮⑱⑱⑱⑱
- 2010年代(2010~2012年)：①⑮⑱⑱

これらの論文と、前項で考察した詩教育全体の動向とを照らし合わせると、イギリスにおける詩創作指導の現代までの時代的な区分は以下になるだろう。

- I. 詩創作指導の隆盛期(1970年代・1980年代)
- II. 詩創作指導の低迷期(1990年代)
- III. 詩創作指導の再興期(2000年代以降)

これらの区分に従って、それぞれの時期に見る詩創作指導の特徴について、論文内容をもとにしながら周辺の文献を参照することで考察を行う。

〈I. 詩創作指導の隆盛期(1970年代・1980年代)〉

上記の詩創作指導に関する論文の並びを見ると、

1970年代・1980年代に集中していた「⑤詩創作指導アイデア」は1990年代以降本誌において取り上げられていないということが分かる。この年代に⑤が集中していることは、1960年代において生じた「くすばらしい詩を理解すること」から「詩創作を教えること」への変化²⁶⁾を機に、教室においてどのように詩創作を指導していくかということに関心が集中した時期であるということを示しているといえる。*Young(1975)は書くための刺激として詩を読んだりクラスで校庭の池に出掛けたりすることや詩をどのように修正していくかということを主眼において論を展開しており、*Deller(1982)や*Shaw(1985)は、様々な形式を用いることで詩創作の足がかりとするようなアイデアを挙げながら、子どもたちが授業の中で楽しめる詩創作指導の姿について論じている。またこの時期には、木下(1967)が紹介したMargaret Langdonや堀江(1984)が取り上げたKenneth Kochの詩創作指導書、さらに、現在に至るまで多くのイギリスの国語教師が授業の指針として用い支持され続けているSandy Brownjohn(1980)の著作も初めて刊行されており、詩創作にまつわる多様な指導方法が開拓され、追求されていた時代だということが分かる。

山元(1988)はこうした当時のイギリスの詩創作指導の状況について、「詩のさまざまな形式の持つ力を十全に発揮させて、生徒たちの内面を揺り動かし、内部に眠る創造性をこそ表出させることがめざされている」²⁷⁾と指摘し、教師たちへの意識調査を考察する中で「詩を書かせることの意義について、教師たちの意識の中心にあるのは、生徒たちの内面を耕し、「自己一表現」をさせていこうとすること」²⁸⁾だと述べる。

このように子どもたちの「自己一表現」を重要視する傾向については、1986年の*Walterが「教師が語り、教師が選び、教師が執り行いを計画するような伝統的な詩創作指導」²⁹⁾を批判することからも読み取れるように、子どもを教育の中心に据えようとする1960年代から続く「進歩主義運動(Progressive movement)」,児童中心主義教育との関連が強い。1960年代からイギリスの教育にも大きく影響を与えた「進歩主義運動」について、Dymoke(2003)は「進歩主義運動」を「クリエイティブ・ライティング運動」とも称されると述べ、「進歩主義運動の関心は、最終的な生産物というよりもむしろクリエイティブ・ライティングのプロセスと想像力の活性化に向けられていた」³⁰⁾と指摘している。

Ⅱ. 詩創作指導の低迷期(1990年代)

先述のShayerや、上に示したDymokeが指摘したような1960年代から始まった子どもたちの表現への関

心の高まりは、詩教育においても創作へと注目が集まることを示唆する。そのため、1980年代までは継続的に詩創作に関する論文が多く掲載されている。しかし、前項で述べたように、1990年代には、詩創作に関する論文は*Moore and Sedgwick(1990)のみであるということが大きな特徴として指摘できる。

このことは、1988年に行われた教育改革ともなって導入されたGCSE³¹⁾と1989年に制定されたNCに強く影響を受けていることを示している。先に示したような、1990年代における*English in Education*誌に見る詩の読みへの偏向現象は、1960年代から続いてきた詩を子どもたちのものとして捉えようとする動向が、NCの制定やGCSEをはじめとした各種試験の重点化によって一時低迷したことを示している。このような状況は、これまで詩創作指導に取り組んできた者にとって歓迎されるものではないことが推察される。

Ⅲ. 詩創作指導の再興期(2000年代以降)

先の、詩創作指導に関する論文内容の時代別区分を見ると、2000年代に初めて「⑤詩創作と評価」という項目が出現することが分かる。1989年のNC導入以降の時代状況に対応する形で詩創作指導を位置づけようとする、つまり新設されたカリキュラムの中での詩創作の位置を模索しようと論じるのが*Dymoke(2001)である。GCSEの導入とNCの新設は、そうした教育制度に対応したシステムに沿って評価することが求められるということの意味する。評価方法の確立していない分野については、評価が求められるその他の分野に関する指導をどのように行うかという動向の中で必然的に添え物のように埋もれてしまうことが予想される。それが、1990年代に見る詩創作指導の不在の意味する背景である。当時のNCにおいて「書くこと」の領域では散文に関する評価は充実している一方で、詩創作に関する評価が明確にされていなかった。このような観点から、*Dymoke(2001)はNCのシステムに沿う形で詩創作指導の評価方法を構築しようと試みているのである。

また、「⑩詩創作指導実践批評」をする中で*Wilson(2005)は、評価については明示していないものの、1998年に導入されたNCの指導細目であるNational Literacy Strategy(以下NLS)における詩創作指導の取り扱いについて、形式や技巧に注目しすぎたことからくる「形式駆動(form-driven)」³²⁾であると批判しながら、詩創作において子どもたちの内面に生じる思考の存在を指摘することで詩創作指導の教育的意義とその実現に向けた詩創作指導法の在り方について論じる。時代状況の変化によって詩創作指導が一時低迷したことを示す〈詩創作指導の不在〉は、このように

改めて詩創作指導の教育的な意義を訴える論文の出現を導いているのである。

*Wilson(2005)の論のように、思考に焦点が当てられる詩創作指導論は、「認知において言語が果たす役割に注意を向ける」³³⁾という、詩創作指導が子どもたちの認知的側面の育成に貢献する可能性を追求するような動向を導く。そのことと、2000年代以降の詩教育の多様化とが結びつくことによって、イギリスにおいて詩創作指導は再興期を迎えるのである。そしてこの時期には、詩創作指導についての取り上げ方も詩教育全体の傾向と同じように多様化していくことが読み取れる。

その中のひとつとして、「⑩二言語使用者と詩創作」に属する論文が挙げられる(*Burm(2003), *Obied(2007), *Cahnmann-Taylor(2008))。先に考察したように、多民族化が急速に進み、子どもたちを取り巻く言語環境も変化する中で、詩創作指導に期待されるのはこうした社会文化と結びついた「創造性」の育成である。Craft(2005)は、21世紀初頭のイギリスでの「創造性」の認識の特徴のひとつとして「個人というよりもむしろ社会システムを強調する」³⁴⁾ことを指摘している。Craftは創造性が重要視されはじめる1960年代を「初期」と位置づけながら、この特徴をその「初期の風潮とは全く異なっていた」³⁵⁾と示す。つまり〈I. 詩創作指導の隆盛期〉として示した時代においては、子どもたちの「自己一表現」が強調されていたように子どもたちの個人的な成長を志向する意味での詩創作指導が重要視されていたことに対する変化である。子どもたちは成長する個々の存在であると同時に、今この社会を生きることで社会を構成する全体としての存在でもある。共同でどのように社会を形成し、発展させていくのかということが重要視する理念が反映された変化として捉えることができる。

そのため、2010年付近では、「共同作業 (collaborative work)」(*Cahnmann-Taylor(2008)やワークショップ(*Schillinger, Meyer and Vinz(2010)などを取り上げる論文が中心となっている。そこで注目されるのが、*Spiro(2007)や*Bluett(2010), *Xerri(2011)に見られる、子どもたちが共同で詩を書いていく教室における「⑨教師の役割」である。そうした論文で示される「書き手としての教師」という文言はこの時代において増え始め、そのようにふるまうことが子どもたちの詩を書くことへのプレッシャーを軽減すると同時に、積極的な創造への参加という形での学びの姿をうみだすことに寄与するということが主張されている。そしてそれらの多数がまたGCSEをはじめとする各種試験で求められる力と結びつけられる形で論じられているこ

とも大きな特徴である。これは、時代の要請に応えるための詩創作の位置づけを模索しようとする2000年代初頭の動向を受け継ぐものとして捉えることができる一方で、詩創作指導が創作のための創作という形ではなく、国語能力育成の一端を担う存在として実現する可能性の示唆を表している読み取れる。

そのことは、ワークショップという授業形態によって創作のみならず詩の読み、創作、発表(共有)という領域横断的な単元構造を持った指導が提案されていることともつながりを持つ。早い時期から積極的に子どもたちの言語文化と詩の形式との関連性が論じられてきたことと、詩の「マルチモダリティ」という特性とを結びつけた詩教育についての論文が増加してきたことが示しているように、現代の子どもを取り巻く言語環境・言語文化をふまえた国語の教育の必要性と重なり合うことで生じた、現代の詩創作指導論の姿が2010年前後の論文に現れているといえる。

このように、2000年代以降は「再興期」として詩創作指導に再び光が当てられ、また1980年代以前とは異なる形で詩創作指導が取り上げられるようになったことが分かる。しかし依然としてGCSEやNCの学校教育に対する影響は強く、時間数の制限や試験対策などに追われる教師たちは1980年代までに豊かに築き上げられてきた方法を使って詩創作指導を展開することの困難な状況が続いていることは確かである。2000年代になって詩創作指導の取り上げられ方が変わったことも、一方では「再興」と捉えられるものの、他方では、現在の教育制度の下、何とか学校教育の中で詩創作指導の生き残る道を切り開いていかなければならないとする「模索」状態にあると捉えることもできる。

5. 結語

以上の考察から、イギリスにおける過去50年間の詩創作指導は1960年代において子どもの書く詩に関する価値の見直しにはじまり、1980年代まで徐々に詩創作指導が醸成していった〈I. 隆盛期〉から、1989年のNC導入後に学校教育の中で詩創作指導の実現が困難になった〈II. 低迷期〉を経て、その中での詩創作指導の実現をめざした2000年以降の新しい形での〈III. 再興期〉という変遷をたどっていることが分かる。〈I. 隆盛期〉において教師たちは、子どもたちの書く詩に魅了され、*Deller(1982)や*Shaw(1985)において彼らが紙幅の許す限り詩創作アイデアを紹介したように、無限に存在する詩創作の方法に力強さを感じていたことだろう。NCがまだ導入されておらず、そこでは厳しい評価システムも存在していなかった。

その中で自由に詩創作指導を展開して来たのである。そのため、1980年代までのイギリスにおいて様々に培われた詩創作指導法は今日でも価値のあるものとして現代の私たちは多くのものを学ぶことができる。教育制度の整備によって一度は姿を消したように見受けられた詩創作指導は、そうした〈Ⅱ. 低迷期〉を経ることで新しい形で再び注目され始める。決して現在の形が完成形であるというわけではないが、評価システムが確立した今日において学校教育の中で意義ある形で実現することのできる詩創作指導法のあり方として、わが国の詩創作指導にも示唆を与えるものは多いと考えられる。

今回主に考察を行った1975年から2012年までのイギリスでは、これまで述べてきたように1980年代後半においてNCをはじめとした教育制度の整備という大きな変動があったため、それが学校教育における詩創作指導に大きな影響を与えたのは間違いない。しかし、詩創作指導の動向とその変容を導いたのは教育制度の整備のみならず、文学教育における読者反応理論の浸透や社会環境・言語環境の多様化など、様々な要因が存在していることが明らかとなった。特に現代において、詩教育は読むことや書くことなどの各領域に区別されるものとしてではなく、詩のあらゆる特性を活かしながらかくこと、書くこと、共有することなどの様々な側面を有機的に結びつけて行う指導が増えていることも今回の調査から明らかとなっている。現代の子どもたちを取り巻く言語環境のマルチメディア化とも密接な関係を持っているといえる動向である。このことは、多様化する民族と言語環境に対応し、共同でどのように社会を形成し発展させていくのかということに主眼が置かれ始めたことを示すものとして位置づけることができる。

このように、時代に対応して揺れ動きつつも、今回考察を行ったイギリスの詩創作指導からは、以下の2点をその特徴として見いだすことができる。1点目は、詩創作において〈形式〉を使うことが子どもたちの意見や意思としての〈声〉や思考にもたらす意味や、それらの関係とその取り扱い方に関する議論が長く続けられていることである。2点目は、1970年代から見られるものの近年になって注目の浴び方が顕著なワークショップという学習形態によって共同で学び合うことの意義に関する議論である。前者に関しては、〈形式〉ということばの操作と子どもとの関係を重要視しているという意味で機能主義的な言語観が反映されている。そして後者は学校を〈共同体〉として捉えるイギリスの経験主義的な教育観が反映されたものである。これらの事象は決して別々のものではなく、密接にか

かわり合いながらひとつの教室をつくりあげていくものだとはいえる。

【注】

- 1) 安直哉(2005)『イギリス中等音声国語教育史研究』東洋館出版社, p.199
- 2) 湊吉正(1975)「イギリスの国語科教育学研究」『国語科教育学研究:1 国語科教育学の建設』(井上敏夫・野地潤家編) 明治図書(1975)
- 3) 湊(1975)p.134:注2に同じ
- 4) 湊(1975)p.134:注2に同じ
- 5) DIXON John (1967), *Growth through English: set in the perspective of the seventies*, Oxford University Press, p.2
- 6) イギリスの国語教育をめぐる先行研究は多く見られるが、詩創作指導に特化した形の研究としては管見の限り岡本清美(1976)「イギリスにおける児童詩教育:一九六〇〜一九七〇」『国語教育学研究誌』創刊号, 大阪教育大学国語教育研究室, 木下紀美子(1974)「イギリスの作文教育」『世界の作文教育』(野地潤家編) 文化評論出版, 山元隆春(1988)「イギリスの文学教育(3)一詩の創作指導一」『教育学研究紀要』vol.33, 中国四国教育学会のみである。
- 7) 松山雅子(1994)「イギリスの国語教育研究」『国語教育基本論文集成 第5巻 国語科教育課程論(1)教育課程・比較国語教育課程論』明治図書, p.263
- 8) SHAYER David (1972), *The teaching of English in schools 1900-1970*, Routledge & Kegan Paul, p.159
- 9) 1964年〜1966年はそれぞれ「vol.A1」「vol.A2」「vol.A3」とされており、1967年から正式に「vol.1」が開始される。
- 10) *English in Education*, vol.46, Issue1, 2012より
- 11) *English in Education*, vol.46, Issue1, 2012より
- 12) わが国では「マザー・グース」として有名なイギリスの遊び歌を指す。
- 13) STIBBS Andrew (1995), The Specialness of Poetry, *English in Education*, 29(3), NATE p.14
- 14) STABLES Andrew (2002), Poetic Experience: Found or Made?, *English in Education*, 36(3), NATE, p.34
- 15) DIAS Patrick & HAYHOE Michael (1988), *Developing Response to Poetry*, Open University Press, p.114
- 16) GARNETT David (1989), Coxed to Victory?, *English in Education*, 23(2), NATE, p.85

- 17) HODGES Gabrielle Cliff (1995), *Painting, Poetry and Pots of Basil*, *English in Education*, 29(3), NATE より
- 18) BRYAN Beverley (1995), The Role of context in Defining Adolescent Responses to Caribbean Poetry: A comparative Case, *English in Education*, 29(1), NATE, p.42
- 19) Bryan(1995)p.42 : 注17に同じ
- 20) DfE and QCA (1999), *English in the National Curriculum*, London: HMSO, p.9
- 21) 松山雅子(1992)「イギリスの文学教育—文学を核とした GCSE 国語科カリキュラム(第4・5学年)—」『大阪教育大学紀要 第V部門』第40巻第2号, 大阪教育大学, p.254
- 22) 黒柳修一(2011)『現代イギリスの教育論—系譜と構造』クレス出版, p.137
- 23) 羽田潤(2011)『イギリス国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究—マルチモーダル・テキストの活用を中心に—』広島大学大学院教育学研究科学位請求論文, p.12
- 24) 羽田(2011)pp.12-13 : 注22に同じ ; また「モード」について羽田は、「意味を作るための、社会的に形成され、文化的に与えられた、文化的に与えられた(ママ)一つの記号的な資源」という Kress の言(Kress and Leeuwen (2003) p.79) によって説明している。
- 25) HUGHES Janette (2008), the 'screen-size' art: Using digital media to perform poetry, *English in Education*, 42(2), NATE, p.148
- 26) SEDGWICK Fred (2003), *Teaching Poetry*, Continuum Intl Pub Group, p.13
- 27) 山元(1988)p.27 : 注6に同じ
- 28) 山元(1988)p.25 : 注6に同じ
- 29) WALTER Colin (1986), The Many Years of Telling: A Tradition of Failed Practice, *English in Education*, 20(2), NATE, p.37
- 30) DYMOKE Sue (2003), *Drafting and Assessing poetry*, Paul Chapman Publishing, p.173
- 31) 義務教育終了資格試験のこと。「従来の GCE (General Certificate of Education)O レベルと CSE (Certificate of Secondary Education) の一本化をねらった義務教育終了時の十六歳児を主な対象とする資格試験 (p.255)」と松山(1992 : 注20に同じ)によって説明されている。
- 32) WILSON Anthony (2005), The best forms in the best order? Current poetry writing pedagogy at KS2, *English in Education*, 39(3), NATE, p.23
- 33) LOCKE Terry (2010), Reading, wiring and speaking poetry, in *The Routledge International Handbook of English, Language and Literacy Teaching* (Dominic Wyse et al. ed.), Routledge, p.376
- 34) CRAFT Anna (2005), Changes in the landscape for creativity in education, in *Creativity in Primary Education* (Anthony Wilson ed.), Learning Matters, p.15
- 35) Craft (2005) : 注23に同じ

【引用参考文献】

- ANDREWS Richard (1989), Beyond 'voice' in poetry, *English in Education*, 23(3), NATE
- BOARDMAN Tim (1985), Participating in Poetry: Some More Ideas, *English in Education*, 19(1), NATE
- BOWKETT John, DAVIE John, PARKER Stephen (1977), Poetry Teaching and the Language children Use, *English in Education*, 11(3), NATE
- BROWNJOHN Sandy (1980), *Does it have to Rhyme?: Teaching children to write poetry*, Hodder Murray
- BULETT Jane (2010), Oh, do not ask 'what is it?': an explication of PhD through Creative Practice and its implications for the Teaching of English, *English in Education*, 44(1), NATE
- BURM Andrew (2003), 'Two tongues Occupy My Mouth'-Poetry, Performance and the Moving Image, *English in Education*, 37(3), NATE
- CAHNMANN-TAYLOR Melisa (2008), What bilingual poets can do: Re-visioning English education for biliteracy, *English in Education*, 42(3), NATE
- CULLINGFORD Cedric (1979), Children and Poetry, *English in Education*, 13(2), NATE
- DELLER Bill (1982), Forms of Poetry, *English in Education*, 16(1), NATE
- DYMOKE Sue (2001), Taking Poetry off its Pedestal: The Place of Poetry Writing in an Assessment-Driven Curriculum, *English in Education*, 35(3), NATE
- HENNESSY Jennifer (2011), Packaging poetry? Pupils' perspectives of their learning experience within the post-primary poetry classroom, *English in Education*, 45(3), NATE
- KRESS Gunther and Leeuwen Theo Van (2001), *Multimodal Discourse*, Hodder Education

- KRESS Gunther (2003), *Literacy in the New Media Age*, Routledge
- LAMBIRTH Andrew (2007), Poetry under control: social reproduction strategies and children's literature, *English in Education*, 41(3), NATE
- MURRAY Geraldine (1975), Poetry in the Classroom, *English in Education*, 9(3), NATE
- OBIED Vicky (2007), "Why did I nothing?" Poetry and the experiences of bilingual pupils in a mainstream inner-city secondary school, *English in Education*, 41(3), NATE
- PIKE A. Mark (2011), Developing as an Ethical English Teacher: Valuing the personal and Poetic in Professional Learning, *English in Education*, 45(2), NATE
- SCHLLINGR Trace, MEYER and VINTZ Ruth (2010), Poetry immersion: Reading, writing and performing with secondary students, *English in Education*, 44(2), NATE
- SHAW A. Michael (1985), Word and Image-Mixed Ability Poetry?, *English in Education*, 19(3), NATE
- SPIRO Jane (2007), Teaching poetry: writing poetry-teaching as a writer, *English in Education*, 41(3), NATE
- STEVENS David (2007), 'Draw your own conclusions': teaching pre-twentieth century poetry in an arts context, *English in Education*, 41(3), NATE
- TARLETON Ray (1983), Children's thinking and poetry, *English in Education*, 17(3), NATE
- WILSON Anthony (2001), Brownjohn, Hughes, Pirrie, and Rosen: What Rhymes with Oral Writing?, *English in Education*, 35(2), NATE
- XERRI Daniel (2011), Shared Writing via Contemporary Poetry, *English in Education*, 45(2), NATE
- YOUNG David (1975), Shaping a Poem, *English in Education*, 9(3), NATE
- 木下紀美子(1977)「イギリスにおける自由詩の創作指導－Mrs. M. Langdonによる Intensive Writing について－」『国語教育学研究誌』第2号, 大阪教育大学国語教育研究室
- 堀江祐爾(1984)「アメリカの詩人による児童詩の創作指導: Kenneth Koch 氏の実践を中心に」『国語教育学研究誌』第5号, 大阪教育大学国語教育研究室
(主任指導教員: 山元隆春)